

第9回 作手地域協議会 会議録【要約】

日時	令和元年10月25日(金) 午後7時00分～午後7時25分	公開・一部非公開・非公開	
場所	作手総合支所 会議室		
出席者	委員20名(欠席者4名) 事務局5名	傍聴人数	なし
次第	<p>1 あいさつ</p> <p>2 連絡事項</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第10回作手地域協議会日程について <p>3 市長との懇談会</p> <p>(配布資料)</p> <p>次第</p>		

1 あいさつ

2 連絡事項

第10回作手地域協議会の日程

日時：令和元年11月15日（金）午後7時30分から

場所：作手総合支所 会議室

3 市長との懇談会

〈懇談内容〉

委員	<p>新城市も合併して14年が経過しました。合併当初は、合併したことによる特別な予算で、つくで交流館や作手小学校などの施設、そして市役所の庁舎など、多くの資金をあて整備していただきました。誠にありがとうございます。しかし、この合併したことによる財源も、永遠に続くわけでもなく、将来において財源が削減されていくことは当然のことかと思っています。そのような厳しい財源の中で、私たち作手地域協議会でも、作手の将来について考えていく必要があると思っています。そこで、市長には市のトップという立場から、この作手地域のあり方や役割、将来どのような地域になって欲しい、また、それを果たすための方策など、市長のお考えを、お聞かせいただきたい。</p>
市長	<p>とても大きなご質問をいただきました。この作手地域をどのように位置付けているか、またこの地域の将来をどういう風に見ているのかということ、皆さんそれぞれの肌で感じる部分もあるかと思えます。私の方から新城市全体、或いは東三河地域、あるいは愛知県というような単位の中で、作手地域をどのように見ているかというお話をさせていただき、これから地域の皆さんが、将来を考えるときに一つの参考にしていただければと思います。</p> <p>最近のニュースなどで、ポツポツと気になることがあります。例えば、宅配サービスなどでドライバーの方がいなくてどうにもならない、或いはバスの運転手がいなくて、路線バスの運行ができないなど、色んなことを聴きます。つまり労働力がなくなり、既存のシステムが立ち行かなくなるということが、少しずつ色んなところで、ポツポツと出てきているわけです。それは日本全体でまだ、人口減少の実感というのは共有されていないと私は思います。どういうことかと言うと、明治の初めから百数十年で1億3千万人くらいまで人口が増えました。これから2、30年の間に、またガンと落ちていく。ちょうどジェットコースターに乗った時の状態を見てもらえば分かるのですが、カタカタ登ってきて、これから真っ逆さまに落ちていく、急降下で落ちていく時代を迎えると思うのです。これは日本全体の避けられないことだと思います。ところが、ジェットコースターに皆さん一度は乗ったことがあるかと思うのですが、カタカタを上に登ってきて、先頭が下り坂になっても、後ろはまだ登っている状態って想像がつくかと思えます。山なりになっている状態です。先頭の方は、これから落ちるぞという実感があるわけですが、だけれどもまだ後ろの方は</p>

カタカタ登っているわけです。例えば愛知県で言うと、名古屋、尾張方面の市は、まだ人口が増加している市がたくさんあります。愛知県の市長会などに行くと、「うちの市は、小学校をつくらなければいけない。」とか、「水道をもう一回整備しなければいけない。」という内容を言い交している市長さん方がいます。一方で新城市は人口減少に入っています。色んなシグナルが出ています。今まで当たり前に来てきたこと、維持してきたサービスが、お金がないとか、システムがうまくいかないとか、技術がないとかではなく、それを動かす人がいないから、できかねるというアップアップな状態が始ってるのだけれども、まだ人口が増えている地域があるものだから、日本全体では共有できていないのです。だけどこれがあと20年すると、東京圏まで含めて人口減少に入っていく。その時には全員がこの状態になります。その時に、こんなことだったんだと気づく人たちが最後尾にいるわけです。

だけど、我々はかなり前が見えているのです。作手の人も鳳来の人も、新城のごく一部を除いたところにしても、このような状態で合併をしてきたわけです。そうした時に、人口が減っていくことをどうしていこうとか、或いは過疎化をどうしていこうとかいう議論は、おそらく全員がこうなった時には、もうそんなこと言っている状態ではなくなっています。その中で、どういう展望を、どういう未来を見ていくかが、我々の課題だと思います。今でも人口増加を掲げている市も町もあります。或いは実際に増えているから、それに対応しなければいけない市もありますが、我々新城、特に作手、鳳来は、その段階はもう終わっているということは、我々自身がすっかり頭に入れていかなければいけないと思います。

ではその中で、どうやって新しい街を作っていくのですか、地域をつくっていくのですかという課題に、本気になって我々が直面していかなければいけない。

では、どこから活力を得るのか。2つあると思います。一つは、我々作手地域の皆さんが出来るだけ産業の基盤を、しっかり持っていく。飯が食える、稼げる種を地域の中にしっかり持っていくということと、それと外からの力をどうやって引き入れて、活力を増していくのかということ。その両面だと思うのです。作手の地域の基盤の産業は、やはり一貫して変わらず、農業であったり、林業は今厳しいですけど林業であったり、つまり農林業。そして観光であったり、交流の人口を増やしていくこと。そして私どもが注目してることは、トヨタの研究所。あそこに5,000人からの新しい雇用が生まれてきます。新しい人達が一日に数千台の車が行き来をする。それは作手からわずか20分のところにあるという。このことを視野に入れて、新しい人と人との繋がりをたくさん付けていくということに、私たちが全力を挙げていかなければいけないと思っています。

例えば農業でも、新規就農者を受け入れていくことについて、新城市は愛知県の中ではトップです。ここ十年くらいたって、何十人からかの実績をあげています。その基となるのが、作手の皆さんが作手村時代に作ったつくで農林業公社です。それが農業の色んな基盤整備、土地の貸し借りなど一生懸命やっ

てきていただいた。合併後に新城市になってからやったことは何かと言うと、農協とお話をして、農協は市に頼るのではなく、市も農協になすり付けるのではなく、お互いにリスクを背負っていきこうじゃないかと話をしました。そのような中から、市役所の中に農業振興対策室を作りました。それは、農協の皆さんと市の農業課と農林業公社が一つのフロアで、情報を共有しながら、色んな農業政策をやっていきたいと思いますという協力する体制ができました。それからその次には、作手では菌床シイタケを産地化しようと頑張っています。菌床シイタケは元菌を購入するわけですが、その時に、新規に入ってきた人たち、もう一回やってみようとする人たちに対し、購入費用の補助金を出すということ。その補助金について、これも農協とお話をして市も責任をとるし、農協も責任をとるということでやっています。

このような積み重ねが農業の人材を受け入れる時の仕組みづくりに繋がっています。なぜ新城市の新規就農の受け入れが愛知県で一番になっているかと言うと、すごくきめ細やかな受け入れ対策をしています。例えば、新規就農者フェアがあって、そこには都会から農業をやりたいと人がくるのですが、それに対して一般的に農業の素晴らしさを伝えるだけではなく、いくら稼げば独り立ちができるという収支計算や、モデルとして自分の資金が今いくらあり、国からの補助金がいくらで、研修を1年間やった後、収入がいくら見込めるか、またリスクはここにありますが、だからこういう覚悟で来てくださいななどとやっています。また受け入れ側の集落の人などのお世話をしたりしています。

つまり何が言いたいかと言うと、作手には素晴らしい土地があります。農地があり、林地があり、あるいは住宅地であれば、夏はクーラーがいらぬような素晴らしい住環境があります。それを一番の元手として活かしていく地元の人たち、そしてやっぱり新しい力を入れてきて、それを繋ぎ合わせていかなければいけない。新城市の第1次総合計画は「市民がつなぐ 山の湊 創造都市」がキャッチフレーズでした。今度の第2次総合計画では、「つながる力 豊かさ開拓 山の湊しんしろ」をキャッチフレーズにしています。一貫して「つながる」を市政の一番のポイントに置いています。地域と地域、或いはお年寄りとお若者たち、男と女、都市と農村、これらを繋げる力をどうやってつけていけるかってことに活路をつけていかなければいけないと思います。

日本人の人口全体は減っていきますけれども、外国の人たちが入ってくる、観光客も入ってくる、今回のラグビーワールドカップでも日本の選手だけではない力が混ざり合って、爆発的な力ができました。それを本当に快く、気持ちよく受け入れて後押しをしようとする日本人の人たちの熱意が作り上げたと思います。これからの日本の姿とはあのようなものだと思います。ですので、今ある作手の資源を我々が大切に守って、農業であったり林業であったり、基盤をこれかもしっかり守って、維持していけるところは維持していくとともに、新しい繋がりを求めて外にも打って出るし、或いは新しい人たちを受け入れていくための仕掛けを作っていかなければいけないと思います。

具体的に言えば、農林業等の基盤をしっかりと整備をしていくとともに、あと数年後のトヨタのテストコースがオープンしていくことを見据えて、住宅環境と教育環境が一番の要だと思います。作手の皆さんは早くからこのことに着目されて、地域自治体の独自の予算で英語をこども園の時からやっというということで、英語講師の派遣事業を地域自治体予算としてやっという流れができています。一方、もう少し住宅整備というのはいかなければいけないと思いますが、住環境と教育環境の整備をしていく。そして、やはり基盤というものを、我々がしっかりと持っていくことです。

日本の農林業はこれから恐らく二極化していきます。すごく大規模になって国際競争力を持って輸出をしていくような大規模化、或いは会社化、法人化した農業。それから大規模ではないけれども、しっかりした販路をもって、そして独自の技術開発を自分たちでしっかりとやっという、もちろんAIとかIoTとかが新しい技術になっていくと思うので、それらをどんどん取り入れながら、自分たちのたとえ小さくてもしっかりとその中で稼げる農業を作っという。林業もこれから森林環境税が国から入ってきますけれど、これも大きな変化をゆくゆくは及ぼしてきます。大規模な林業家が林地を育てていく流れがあるとともに、自分で切って、搬出して、また植えてという自伐型林業というもの。そうやっという自分たちの生業を作っというということは、恐れる必要はどちらもないので、自分の道をどこに定めていくかという覚悟を決めて、それぞれ取り組んでいくことではないかと思っいます。

そういう意味で作手地域に対して、私ども新城市としては、新しい独自の方面、方角を見れる地域だと思っいます。新城・鳳来は、どちらかと言っうと豊川の流に沿って豊橋、浜松、東と南の方面を見ます。作手地域はどちらかと言っうと、矢作の流を含めて、豊田、岡崎、名古屋が見える。そういう中で、自分たちの繋がる力を色んな場につけていただっきたい。つまり、1人の人口が減ったとき、1人の繋がる力をプラス2にすれば、そこで新しい価値観が生まれ、新しい交流が生まれますから、そこで新しい稼ぎが生まれてくる。そういう門戸を広げながら進んでいくのが我々のこれからの道かと思っいます。それに相応しい施策をどれだけ具体化していけるかっというということで、これからの道を探っていきたいと思っいます。

委員

作手歴史民俗資料館についてですが、私の家の物も展示していただっているのですが、今後どうなっってしまうのかっというところを伺ったいと思っいます。

市長

本当に大きな決断をしなければいけないということだけは皆さんにお伝えしたいと思っいます。今のまま維持するのは、大変厳しいことは事実であります。来館者は増えています。ここ1、2年でかなり増えています。それはお城ブームで、続日本

のお城百選に古宮城址が選ばれて、歴史を好きな方々がたくさんお見えになり、そこでスタンプを押していただくということもあって増えています。それはもちろんこれからも大きく取り入れたり、古宮城址を始めとした城址や史跡も歴史文化として、整備していきながら交流人口を増やしていきます。ただ、そのための本当の拠点として、今の歴史民俗資料館が機能しているかという点、必ずしもそうではないと思います。と言うのは、それが来る前は本当に厳しい状態でした。けれどもあの中にある民俗資料、そして或いは古宮城址を訪れる人たちの動きというのは大切にしていかなければいけませんから、その中であの施設をどうやって維持、運営していくのか。というのが、我々も知恵の出どころです。手作り村との連携、それから古宮城址の活かし方、そういうものの中で歴史民俗資料館の位置付けをはっきりさせていかなければいけないと思います。

まだ具体的に決まっていますので、皆さんと知恵を出していかなければいけません。もう十分に分かっていると思うのですが、「残して欲しい。」という気持ちがそれぞれの地域にあるのは当たり前のことですし、それはしっかり受け止めているつもりです。けれども、「残して欲しい」「残せない」「じゃどうしてくれるんだ」という議論の枠の中からは、あまり生産的な意見は出てこないと思います。それぞれの思いを繋げながら、どうしたらこの地域が一番生きていくのか、そのためにこの歴史民俗資料館をもう一回どうやって位置付けし直していくかを、両方で知恵を絞っていかなければいけないし、協力し合わなければいけないと思っています。率直なことをお話ししながら、これから皆さんと腹を割って協議をしていきたいと思っています。色んな案があるかと思っています。縮小して維持していく形もありますし、思い切って歴史民俗資料館の今ある役割をどこか別の所に移して、歴史民俗資料館の建物は別の機能にして役立てていくなど、色んな考え方があるかと思っています。ただ、いつまでに廃止をして、閉鎖するという考えはありません。明日から閉鎖です、終わりです、いずれ壊しますという考えは、今持っておりません。ですから、これからも皆さんとの協議の中で、我々の率直な思いも伝えさせていただきながら協議をしていきたいと思っています。

【終了】